

ひょうご  
—神と伝—  
伝説紀行

五社明神の国造り  
泥海の大蛇とのたたかい

鼻かけ地蔵  
白いお米がぼろぼろ落ちる

粟鹿山  
「大山」の地名伝説

伝説

五社明神の国造り  
泥海の大蛇とのたたかい  
鼻かけ地蔵  
白いお米がぼろぼろ落ちる  
粟鹿山  
「大山」の地名伝説

紀行

国造りの神様と鼻かけ地蔵

- ・ 神々の伝説とはるかな過去の記憶
- ・ 円山川をさかのぼる
- ・ 絹巻神社
- ・ 来日岳
- ・ 出石神社
- ・ 粟鹿神社
- ・ 鼻かけ地蔵
- ・ 小田井縣神社
- ・ 養父神社と齋神社
- ・ 粟鹿山

関連情報

用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## 五社明神の国造り 泥海の大蛇とのたたかい

大昔、まだ豊岡（とよおか）のあたりが、一面にどろの海だったころのことです。



人々は十分な土地がなくて、住むのにも耕すのにも困っていました。そのうえ悪いけものも多く、田畑をあらしたり、子供をおそったりするので、人々はたいへん苦しんでいました。この土地を治める五人の神様は、そのようすを見て、なんとかしてもっと広く、住みよい所にしたいものだと考えました。

そこで神様たちは、床尾山（とこのおさん）に登って、どろの海を見わたしてみました。すると、来日口（くるひぐち）のあたりに、ものすごく大きな岩があって水をせき止めています。

「あの大きな岩が、水をせき止めているのだな」

「あれを切り開けば、どろ水は海へ流れるにちがいない」

「そうすれば、もっと広い土地ができるだろう」

「それはよい考えだ。どろの海がなくなれば、たくさんの人が安心して暮らせる」

神様たちはさっそく相談して、大きな岩を切り開くことにしました。

大きな岩を断ち割り、切り開くと、どろ海の水はごうごうと音を立てて、海の方へ流れ始めました。神様たちはたいそう喜んで、そのようすを見ていました。

ところが、水が少なくなり始めたどろ海のまん中から、とつぜんおそろしい大蛇（だいじゃ）が頭を出して、ものすごくいなり声を上げながら、切り開かれた岩へ泳ぎはじめました。そして、来日口に横たわって水の流れをせき止めてしまったのです。

神様たちはおどろきました。

「この大蛇は、どろの海の主にちがいない」

「これを追いはらわねば、いつまでたっても水はなくなるぞ」



神様たちがそろって、大蛇を追いはらおうとすると、大蛇はすぐにどろにもぐってにげてしまいます。あきらめてひきあげると、大蛇はまたあらわれて、水をせき止めてしまいます。神様たちはたいそうおこりました。

すきを見て大蛇に飛びかかり、神様たちは、とうとう大蛇を岸に引きずり上げてしまいました。そして頭と尻尾（しっぽ）をつかんで、まっぴたつに引きちぎろうとしましたが、大蛇もそうはさせまいと大暴れします。それどころか、太くて長い体を神様たちに巻き付けて、しめころそうとするのでした。

五人の神様と大蛇は、上になったり下になったりしながら、長い間戦いました。大蛇が転がるたびに、地面は地震（じしん）のようにゆれます。けれども五人が力をあわせ、死にものぐるいでたたかいたので、大蛇もしだいにつかれてきました。そこで神様たちが、大蛇の頭と尻尾にとびかかって、えいっと力をこめて引っ張りますと、さしもの大蛇も真っ二つになってしまいました。

こうして、どろの海の水は全部日本海へと流れ出し、後には豊かな広い土地が残りました。そしてどろの海のまわりにはびこっていた悪いけものたちも、みなにげ出してしまいましたので、人々はたいへん喜び、それからは安心して暮らせるようになったということです。

このできごとをお祝いして、毎年八月に、わらで大蛇の姿をした太いつなをつくり、村人みんなでひっぱってちぎるというお祭りが、行われるようになったということです。



五社明神の国造り 泥海の大蛇とのたたかい  
おわり



## 鼻かけ地蔵

### 白いお米がぼろぼろ落ちる



昔、但馬（たじま）の楽々浦（ささうら）の村に、貧しい漁師の男が住んでいました。毎日、楽々浦であみを打って働いていましたが、暮らしは少しも楽になりません。そんなある日、男の夢にお地蔵様があらわれて、こんなふうにおっしゃいました。

「私は、大水にさらわれて、楽々浦の底にしずんでいるのだよ。暗いし冷たいし、その上ここにいたのでは、人々を救うこともできない。どうかおまえの力で助けておくれ」

ふしぎな夢もあるものだ。男はそう思いましたが、翌日さっそくあみを打って水底をさぐってみました。すると、夢のとおりのお地蔵様があみにかかってあがってきたのです。男はさっそく、小さなお堂をこしらえて、お地蔵様をていねいにお祭りしました。

あくる日、男がお参りしてみると、お地蔵様の足元に白い米つぶがたくさん散らばっています。どうしたことかと思って見ていると、なんとお地蔵様の鼻の穴からぼろり、ぼろりと米つぶがこぼれ落ちているではありませんか。男はびっくりするやらうれしいやら。さっそく、おけを持ち出して、お地蔵様の鼻の下に置きました。



ぼろりぼろりとこぼれ落ちるお米は、だんだんとおけの中にたまってゆきます。  
「これはありがたい。もう苦勞をして働かなくても暮らしていける」

それからというもの、お地蔵様の鼻の穴からこぼれるお米で、男はだんだん豊かになりました。いつまでも止まることなく出てくるお米を、近所の人たちに分けてやるようにもなりました。

ある日、男は考えました。

「あの鼻の穴がもっと大きければ、もっとたくさんお米が出てくるんじゃないかな。そうすれば、もっといい暮らしができる」

ようしっ！ 男はのみと金づちを持ち出すと、さっそくお地蔵様の鼻の穴をけずりはじめました。

トン、カン、カン・・・。

鼻の穴は少しずつ大きくなってゆきます。「よしよし」男はにっこりしました。

「もう少しだ」

ところが、あと少しというところで、手元がくるってしまったのです。

「あっ！」

しまったと言うひまもなく、次のしゅん間、お地蔵様の鼻は欠け落ちていました。そしてそれきり、お地蔵様の鼻から出ていたお米は、ぱったりと出なくなっていました。

男はぼう然としましたが、もう元にはもどりません。

「何とばちあたりなことをしてしまったんだろう」

男はすっかり目が覚めました。心から反省し、毎日お地蔵様にお参りしておいのりするようになりました。前にもまして、楽々浦であみを打ち、いっしょうけんめい働きました。やがて男はおよめさんをもらい、二人は幸せに暮らしたということです。

今でも、鼻の欠けたお地蔵様は、楽々浦のほりにあるお堂の中で、村の人たちの暮らしを見守っています。どんな願い事でも、ひとつだけちゃんとかねてくれるというお地蔵様には、毎日きれいな花が絶えることはありません。



鼻かけ地蔵 白いお米がぼろぼろ落ちる  
おわり

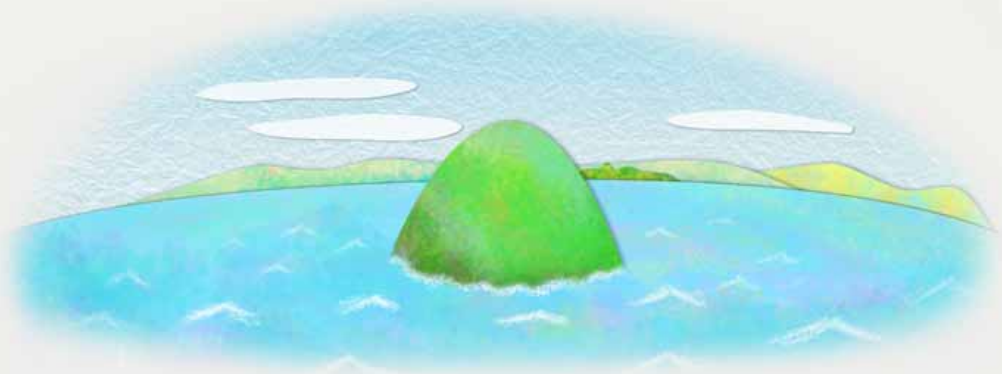
## 粟鹿山

### 「大山」の地名伝説

遠い昔のことです。

但馬（たじま）の山東（さんとう）や和田山（わだやま）のあたりは、向こう岸が見えないほど広い湖でした。粟鹿山（あわがやま）や、まわりの高い山々も、その湖の上に頭を出した島でした。人々は、粟鹿山のことを、大山（おおやま）と呼んでいたそうです。

ある日のこと、アマツヒダカヒコホホデミノミコトという神様が、天から粟鹿山の頂上に降りてきました。そして山の上からあたりを見回して、「この広い湖の水を海へ流し出して、広い土地を造ったならば、人々が住みやすくなるだろう」と考えました。



ここで、この長い名前の神様のことを、少しだけお話ししておきましょう。

アマツヒダカヒコホホデミノミコトは、天の上にある、高天原（たかまがはら）という神様の国から下ってきたニニギノミコトが、地上でコノハナサクヤヒメと結婚（けっこん）して生まれた三人の子（ホデリノミコト・ホスセリノミコト・ホオリノミコト）の一人、ホオリノミコトの別名だということです。

ホオリノミコトにはもう一つ名前があって、山幸彦（やまさちひこ）とも呼ばれていました。お兄さんのホデリノミコトは、海幸彦（うみさちひこ）と呼ばれています。『古事記』という本には、山幸彦が兄の海幸彦との争いに勝って、海の神のむすめ、豊玉姫（とよたまひめ）と結婚し、ウガヤフキアヘズノミコトという子供が生まれたと記されています。そしてこのウガヤフキアヘズノミコトの子供が、日本で最初の天皇である、神武天皇（じんむてんのう）になったという神話へと続いてゆくのです。



さて、粟鹿山の頂上から下りると、アマツヒダカヒコホホデミノミコトは、水をせき止めていた山をけりくずしました。水はごうごうと音を立てて、みんな日本海へと流れ出してしまいました。そのあとには広い土地ができましたが、まだ水気が多くてぬかるんでいたところもありましたので、そこには大きな石のお地蔵様をうめこんで、土地を固めたそうです。

それからというもの、この土地にはたくさんの人が住み着いて、あちこちに豊かな村ができました。人々は、アマツヒダカヒコホホデミノミコトが国を見わたした山を、見国岳（みくにだけ）と呼んで毎日拜んでおりました。

ある日のこと、アマツヒダカヒコホホデミノミコトが見国岳で休んでおると、一頭の美しい牝鹿（めじか）が、三本の粟（あわ）の穂（ほ）を角の上に乗せてやって来て、うやうやしくささげました。これが粟鹿山という名の始まりになったのです。その後人々は、山のふもとに粟鹿神社（あわがじんじゃ）を建てて、アマツヒダカヒコホホデミノミコトをお祭りするようになったということです。



粟鹿山 「大山」の地名伝説

おわり



## 紀行「国造りの神様と鼻かけ地蔵」

### 神々の伝説とはるかな過去の記憶

去年の伝説紀行に登場したアメノヒボコノミコトは、但馬の国造りをした神様（人物？）でもあった。けれども但馬地方には、ほかにも国造りにまつわるお話がいくつか伝えられている。各々の村にも、古くから語り継がれた土地造りの神様の伝説があったのだ。

太古、人々がまだ自然の脅威と向かい合っていたころから、それを克服して自分たちの望む土地を開拓するまでの長い時間の中で生まれてきたのが、そのような神様たちの伝説なのだろう。「五社明神の国造り」や「粟鹿山（あわがやま）」の伝説は、そんな古い記憶をとどめた伝説のように思える。

二つの伝説に共通しているのは、「但馬（特に円山川（まるやまがわ）流域）はかつて湖だったが、神様（たち）が水を海へ流し出して土地を造った」という点である。実はこの「かつて湖だった」というくだりは、必ずしも荒唐無稽（こうとうむけい）な話ではなさそうなのだ。今から6000年ほど前の縄文時代前期は、現代よりもずっと暖かい時代だった。海面は現在よりも数m高く、東京湾や大阪湾は今よりも内陸まで入り込んでいたことが確かめられている（縄文海進）。

但馬の中でも円山川下流域は非常に水はけの悪い土地で、昭和以降もたびたび大洪水を起こしている。近代的な堤防が整備されていてもそうなのだから、そんなものがない古代のことは想像に難くない。実際、円山川支流の出石川周辺を発掘調査してみると、地表から何mも、砂と泥が交互に堆積した軟弱な地層が続いている。

豊岡市中谷や同長谷では、縄文時代の貝塚が見つかっている。中谷貝塚は、円山川の東500mほどの所にある縄文時代中期～晩期の貝塚だが、現在の海岸線からは十数km離れている。長谷貝塚はさらに内陸寄りにある、縄文時代後期の貝塚である。これらの貝塚は、かつて豊岡盆地の奥深くまで汽水湖が入り込んでいたことを物語っている。

縄文時代中期だとおよそ5000年前、晩期でもおよそ3000年前のことである。「神様たちが湖の水を海に流し出した」という伝説は、ひょっとするとこういった太古の記憶を伝えているのではないだろうか。

### 円山川をさかのぼる

円山川をさかのぼって北から南へ。それぞれの神社（北から順に、絹巻神社、小田井縣神社、出石神社、養父神社、粟鹿神社）を訪ねて、五社明神のお話を考えてみた。途中、鼻かけ地蔵さんと、伝説に登場する来日岳（くるひだけ）に立ち寄ったのはもちろんである。



## 絹巻神社

円山川が日本海に注ぐすぐ手前、豊岡市城崎町（きのさきちょう）の気比に、国造りをした五社明神（但馬五社）のひとつ、絹巻神社（きぬまきじんじゃ）がある。円山川と背後の山に挟まれた狭い場所に、河口の方、つまり北を向いて建てられた社殿は、僕たちが訪ねたときにはちょうど工事の最中であった。どうしてこんな狭い場所をわざわざ選んだのだろう。単に建物をというなら、ほかにもっと適地があったんじゃないだろうか。神様が河口をいらんでいる、それには、水との苦闘を繰り返した歴史が隠されているような気がするの、僕の思い込みだろうか。



奉納された北前船の碇



円山川の対岸から



絹巻神社（鳥居）



絹巻神社（本殿）



絹巻神社（看板）

## 鼻かけ地蔵



お地蔵様



本当に鼻がない？

絹巻神社から少し円山川をさかのぼった右岸に、楽々浦（ささうら）という、普通の川では珍しい大きな入り江がある。この楽々浦のほとりに立っているのが、鼻かけ地蔵様だ。円山川から大きく入り込んだ浦は、まわりを囲む小高い山の緑を静かな水面に映した、とても美しい場所である。

鼻かけ地蔵様は、村の人たちにとっても愛されているようで、お祭りを拝見に伺った時には、まさに村中総出のにぎわいだった。区長の岩村隆雄さんのお話では、昔から村でお祭りをしてきたが、『まんが日本昔ばなし』で放送されてから、「鼻かけ地蔵尊祭」として盛大におこなうようになったという。テレビアニメがきっかけで、人々のつながりも強くなったというのは、いかにも現代のお地蔵様らしいエピソードだなと思う。

楽々浦には、ほかに「浮弁天」という弁天様もお祭りされている。「どんなに水かさが上がっても、弁天様だけは沈まない」という伝説があると岩村さんから伺った。

波静かな楽々浦は、美しい景色だけでなくよい漁場としても、古くから生活の糧を与えてくれただろう。どことなくユーモラスな鼻かけ地蔵様にお参りして、何となくほっとしたような気分になりながら、次の目的地を目指した。



楽々浦の景観



お堂の遠景



お堂



お祭り



浮き弁天の遠景



鳥居

## 来日岳

楽々浦からそう遠くない円山川左岸、ちょうど豊岡の町と城崎とを分けるような場所にあるのが、来日岳。少し上流側から見ると、川面にたおやかな山容を映す風景がとても美しい山である。国造りの伝説では、このあたりにあった大岩を、神様が突き崩して水路を開いたことになっている。その真偽は別として、確かにこの来日岳のあたりは、川の左右から山が迫り、兩岸の平野もぐっと狭まっているから、円山川が洪水をおこしたときには水の流れがせき止められそうに見える。



円山川と来日岳



雲海の曙光



日の出



頂上の石仏たち



雲海を背に



輝く雲海



雄大

この来日岳の頂上からは、夏から秋にかけての早朝、素晴らしい雲海を見ることができる。日の出直前の山頂に立つと、遠くに床尾の山々が見え、手前の豊岡盆地から来日岳のふもとにかけて、綿菓子や並べたような雲海が広がる。日の出が近づくとともに、少しずつ色を変える雲は、川の流れに沿うようにごくゆっくりと海の方へと流れてゆく。豊岡盆地の奥深くまで湖となっていた時代、ここからはどんな風景がながめられたのだろう。山頂に立って想像するだけで、ちょっと神様気分である。



床尾山の遠景



雄大な床尾山の山容

## 小田井縣神社



参道から

豊岡市街地の東端、円山川の堤防のすぐわきには、小田井縣神社（おだいがたじんじゃ）がある。南北に延びるまっすぐな街路に向かって建つ石の鳥居をくぐると、きれいに整えられた、明るい境内である。鳥居は南向きだが、本殿は川の方（東）を向いて建てられているから、これも水と関係があるのだろうか。お祭りされているのは、オオナムチノミコトである。



小田井縣神社（門）



小田井縣神社（境内）



本殿と拝殿



拝殿から



## 出石神社

豊岡市出石町（いずしちょう）宮内にある出石神社（いずしじんじゃ）も、但馬五社のひとつである。出石神社にはアメノヒボコノミコトが祭られていて、この人物自身が泥海だった豊岡を開墾したという話が伝えられている（詳細は『ひょうご伝説紀行～語り継がれる村・人・習俗～』参照）。小田井縣神社に祭られているオオナムチノミコトは、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では国占めで争ったライバルなのだけれど、但馬ではどうだったのだろうか。



出石神社（鳥居）



出石神社（桜門）



出石神社（境内）

## 養父神社と齋神社

さらに川をさかのぼった養父市養父市場（やぶしやぶいちば）にあるのが、養父神社（やぶじんじゃ）である。やはり円山川に面して建つ神社であるが、ここには「お走りさん」とか「お走り祭り」と呼ばれる祭りが伝わっている。



狛犬たち



養父神社（鳥居）



養父神社（拝殿）



養父神社（看板）



森に映える朱色の橋



齋神社（鳥居）



残念なことにまだ見たことがないのだけれど、毎年4月15日から16日にかけて、150kgもある神輿（みこし）を担いで、片道およそ18kmもある齋神社（いつきじんじゃ）まで往復する祭りで、特に途中でおこなわれる大屋川の川渡りは圧巻だそうである。祭りの由来は、「但馬五社の神様たちが、齋神社の神様に大蛇退治をお願いしたので、そのお礼としておこなわれるようになった」ものだとしていて、伝説のページとは少し内容が異なっている。ただ、「豊岡のあたりが泥海だった」という点は共通しており、但馬のこの伝承が同じ起源をもっていることが想像できる。



齋神社（本殿）



木立の中を上る階段



齋神社（看板 お走り祭）



## 粟鹿神社



粟鹿神社(鳥居)



粟鹿神社(門)

そして円山川の水源の一つ、粟鹿山のふもとにあるのが粟鹿神社（あわがじんじゃ）である。古代の主要街道の一つであった山陰道、現在の国道427号線が、遠阪峠（とおざかとうげ）を越えて但馬に入って間もなくの南に、以前はうっそうとした鎮守の森を見ることができたが、現在では高速道路に視界を遮られている。



粟鹿神社(本殿)



背後には小さな丘がある



灯がともる



勅使門

『延喜式』の中では、但馬一宮、名神大社と定められている神社である。古くから朝廷の尊崇も厚く、勅使門を備えた格式高い神社は、巨杉が育つ深い鎮守の森に囲まれて、古代の雰囲気そのままに伝えている。本殿の背後には、ご神体として祭られている小山があるが、これはどう見ても自然の山には見えない。

この勅使門には、精緻な鳳凰（ほうおう）の彫刻が施されている。社務所で伺ったところによると、この鳳凰は、かつて夜ごとに鳴き声をあげていたという伝説があるそうだ。



鳳凰



掘り出された鳥居の礎石

## 粟鹿山



粟鹿山(遠景)



霧が昇る

河口から数十キロメートル。円山川に沿う五社の伝説は、どのようにしてできあがってきたのだろうか。その背後にあった太古の記憶は、どうすれば解き明かすことができるのだろうか。アマツヒダカヒコホホデミノミコトが降り立ったという粟鹿山を最後に、今回の紀行を終えることにしたい。



頂上から粟鹿神社方向を望む



頂上から丹波側の眺望

## 用語解説

アメノヒボコノミコト（あめのひぼこのみこと）

天日槍・天日矛とも書く。またアメノヒボコともいう。

記紀や『播磨国風土記』などに記された伝説上の人物。新羅の王子で、妻の阿加流比売（あかるひめ）を追って日本に來たという。その後、越前、近江、丹波などを経て但馬に定着し、その地を開拓したとされている。出石神社の祭神。

円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及ぶ延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

縄文海進（じょうもんかいしん）

後氷期の世界的気温上昇に伴い、完新世初頭（約1万年前）に始まり、縄文時代前期の約6,000年前に最盛期を迎えた海面上昇。最盛期の海面は、現在より数メートル高かったと考えられている。

中谷貝塚（なかのたにかいづか）

豊岡市中谷に所在する縄文時代中期～晩期の貝塚。1913年に発見された、但馬地域を代表する貝塚の一つである。出土する貝はヤマトシジミが98%を占めており、ほかにハマグリ、アサリ、マガキなどが見られる。また、クロダイ、タイ、ニホンジカ、イノシシ、タヌキなどの骨、トチ、ドングリなども出土している。ヤマトシジミは海水と淡水が入り混じる汽水域に生息することから、縄文時代の豊岡盆地が、入り江となっていたことがわかる。

長谷貝塚（ながたにかいづか）

豊岡市長谷に所在する縄文時代後期の貝塚。出土する貝はヤマトシジミが80%を占め、サルボウ、マガキ、ハマグリなども見られる。また、タイ、フグ、ニホンジカ、イノシシ、タヌキなどの骨、トチ、ノブドウなども出土している。中谷貝塚同様、豊岡盆地が汽水域の入り江であったことを示す遺跡である。

絹巻神社（きぬまきじんじゃ）

豊岡市気比（けひ）の、円山川河口右岸に所在する神社で、但馬五社の一つ。天火明命（あまのほあかりのみこと）、天衣織女命（あまのえおりめのみこと）、海部直命（あまのあたえのみこと）を祭神とする。背後の山地に広がる、シイ、クスノキ、サカキ、ダブ、ヤマザクラ、ツバキなどの暖地性樹林は、県の天然記念物に指定されている。

来日岳（くるひだけ）

豊岡市城崎町の円山川左岸にある山。標高は566.7m。山麓には式内社（しきないしゃ）の久流比神社（くるひじんじゃ）が祭られている。夏季の早朝には、山頂から雄大な雲海を見ることができる。

小田井縣神社（おだいがたじんじゃ）

豊岡市小田井町に所在する式内社で、大己貴命（おおなむちのみこと）を祭神とする、但馬五社の一つ。羽柴秀吉の中国地方遠征にともない、多くの神領・神供田を没収されて衰微したが、17～18世紀に復興した。昭和になり、円山川河川工事で移転や境内の改築が行われて現在に至る。

## 用語解説

オオナムチノミコト（おおなむちのみこと）

記紀や風土記に見られる神。国造り、国土経営などの神とされるほか、農業神、商業神、医療神としても信仰される。大穴牟遲神・大己貴命・大穴持命・大汝命など、さまざまに表記される。『播磨国風土記』では、葦原色許乎命（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。また記紀では、大国主神（おおくにぬしのかみ）と同一神として扱われる。こうした神名の多重性は、本来、各地域で伝承された別個の神を、記紀編集などの過程で統一しようとしたため生じたものであろう。

出石神社（いずしじんじゃ）

豊岡市出石町宮内に所在する式内社（しきないしゃ）で、但馬五社の一つ。但馬国の一宮（いちのみや）。アメノヒボコを祭神とし、アメノヒボコが新羅よりもたらした八種神宝（やくさのかんだから）を祭る。

播磨国風土記（はりまのくにふどき）

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

養父神社（やぶじんじゃ）

養父市養父市場に所在する式内社（しきないしゃ）で、但馬五社の一つ。倉稲魂命（うかのみたまのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこなのみこと）などを祭神とする。

お走りさん・お走り祭り（おはしりさん・おはしりまつり）

養父神社で4月15・16日におこなわれる祭りで、但馬三大祭に数えられる。祭りの由来は、但馬五社の神々が養父市斎（いつき）神社の彦狭知命（ひこさしりのみこと）に頼んで豊岡市瀬戸の岩戸を切り開いてもらい、豊かな大地が生まれたので、養父大明神が代表として、彦狭知命にお礼参りするという故事による。

祭りの朝、「ハットウ、ヨゴザルカ」のかけ声で、神輿は養父神社を出発。斎神社までの往復35kmを練り走る。重さ150kgの神輿が、軽く走っていくように見えたことから「お走り」という名が付いたとされる。もとは旧暦12月におこなわれていたが、厳寒の季節で川渡りが大変であったことから、明治10（1877）年に現在の日程になったという。

斎神社（いつきじんじゃ）

養父市長野に所在する神社で、彦狭知命（ひこさしりのみこと）を祭神とする。養父神社との間でおこなわれる「お走り祭り」は、但馬三大祭の一つとされる。

粟鹿神社（あわがじんじゃ）

朝来市山東町粟鹿に所在する式内社。但馬五社の一つで、但馬国一宮ともされている。延喜式に定める名神大社（みょうじんたいしゃ）で、彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）または日子坐王（ひこいますおう）を祭神とする。勅使門は市指定文化財。



## 用語解説

### 延喜式（えんぎしき）

藤原時平、忠平らにより、延喜5（905）年から編纂が始められた法令集で、全50巻。完成は927年。967年から施行され、その後の政治のよりどころとなった。

### 名神大社（みょうじんたいしゃ）

延喜式で定められた神社の社格。鎮座の年代が古く由緒正しくて霊験ある神社。名神社。

### 勅使門（ちやくしもん）

勅使（天皇の使者）が寺社に参向した時、その出入りに使われる門。

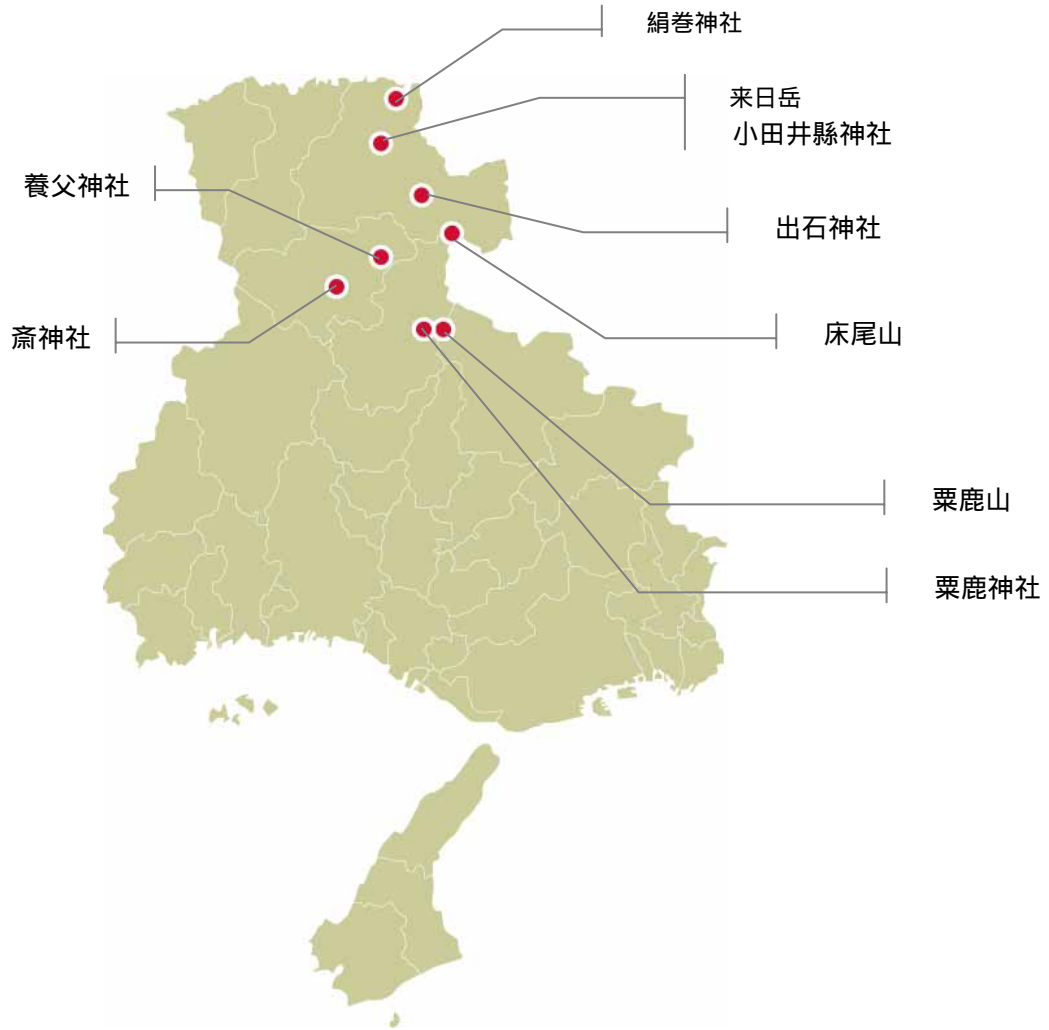
### アマツヒダカヒコホホデミノミコト（あまつひだかひこほほでみのみこと）

記紀神話に登場する神。邇邇芸命（ににぎのみこと）が、高天原から九州の高千穂の峰に降り、木花之佐久夜毘売（このはなのさくやひめ）と結婚して産まれた子の一人。表記は天日高日子穗穗出手見命であり、アマツヒコヒコホホデミノミコトとも読む。三人の子は、火照命（ほでののみこと）、火須勢理命（ほすせりのみこと）、火遠理命（ほおりのみこと）と呼ばれる。このうち火遠理命の別名が、アマツヒダカヒコホホデミノミコトとされている（『古事記』による）。また、火照命は別名を海幸彦（うみさちひこ）、火遠理命は別名を山幸彦（やまさちひこ）ともいう。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫県むかしむかし 西播・但馬	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人会連合会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	Relation 第144号	2007	加芝輝子	たじま農業協同組合
歴史・文化	旧石器考古学事典 三訂版	2007	旧石器文化談話会	学生社
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
その他	日本古典文学大系2 風土記	1958	秋元吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩4 但馬編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	但馬五社絹の宮	2007	絹巻神社	絹巻神社
	養父神社由緒記	不詳	養父神社	養父神社

## 所在地リスト



養父神社	養父市養父町市場840
床尾山	豊岡市出石町奥山・朝来市和田山町竹ノ内
出石神社	豊岡市出石町宮内99
来日岳	豊岡市城崎町来日
小田井縣神社	豊岡市小田井町15-6
絹巻神社	豊岡市気比4006
齋神社	養父市長野265
鼻かけ地蔵	豊岡市楽々浦77
粟鹿山	丹波市青垣町稲土・朝来市山東町粟鹿
粟鹿神社	朝来市山東町粟鹿2152

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と伝

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日